『資質・能力の育成と評価』の勉強会〔２〕協議論点整理メモ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　R３年９月24日

**「マスタールーブリック」と評価の3観点**

**（１）　マスタールーブリックの位置付け**

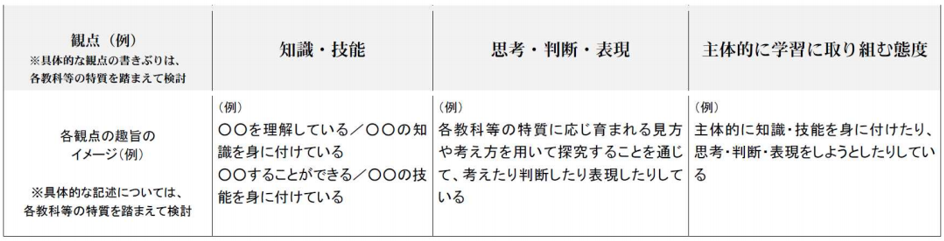
◇　新学習指導要領の内容をカリキュラム・マネジメントとして校内的に，一定の高い水準で教員集団に理解・定着を図ることで，授業水準を高める方策として，**《「育てたい生徒像」　⇔　「育てたい資質・能力」　⇔　「マスタールーブリック」　⇔　「総合探究・教科のルーブリック」　⇔　「観点別評価」　⇔　「評定」》**の「大きな繋がり」が機能することが大事になります。

◇　その「大きな繋がり」の中でのマスタールーブリックの位置付けは，「育てたい資質・能力」を踏まえたものになっているとともに，実際の授業（総合探究，教科・科目）での評価に活かせるものであることが大事になります。

その際，学習指導要領に示されている教科・科目と総合探究の目的・授業内容が「評価の3観点」を前提に，どの程度に生徒に身に付いているのか，また，どの程度にその学びに向き合おうとしているのかを「評価する」ことが主眼となります。マスタールーブリックの資質・能力の項目ごとの評価基準が，教科・科目の観点別評価と一対一対応的に細かく整合性が図られることを主眼とするのではなく（その意味では，「緩やかで大きな整合性」を大事にする意義），資質・能力の育成の観点から位置付けられる「評価の3観点」がバランスよく機能することが「指導と評価の一体化」に繋がるものと思っています。

**（２）マスタールーブリックにおける「文章表記の仕方」について**

◇　今回の協議を通して出てきた悩み・課題の一つにマスタールーブリックの枠に入れる評価基準となる文章表記の仕方が整理しにくいということがありました。文科省の学習指導要領に繋がる論議を行った特別部会で示された資料の中に《学習評価の改善に関する今後の検討の方向性》と題した次の資料《各教科等の評価の観点のイメージ》がありますので，表記の仕方のイメージとして捉えることができると思っています。



**（３）「知識・技能」の位置付けの重要性**

◇　前回と今回の協議を通して浮かび上がってきたことに，高校生の学びの中での「知識・技能」の意義自体の把握と資質・能力の育成における「知識・技能」の位置付けの整理が充分とは言えない面があるように思いました。「知識・技能」の領域は，学習指導要領の「育成を目指す資質・能力の三つの柱（学力の３要素）」の柱の一つになっている大事な要素ですが，高校現場での生徒の学びにおいて「知識・技能」がどのような要素を持っていて，学びの中でどのような機能・役割を果たしているのか，さらにそれを資質・能力の育成としてどのように育てようとしているかの共通理解が学校として，また，教員個人として充分に整理されているとは言えないような印象を持ちました。〔参考：◇カリ・マネ＞★カリ・マネの実際＞学びの構造〕

◇　私見的なイメージになりますが，「個々バラバラの知識（単語・語句・用語・基礎的概念など）」の量を増やすことも「知識の拡大」と言えますし，一定の関連性のもとに多くのことを「知っている」ことも大事なことだと思いますが，より大事なことは，「個々の知識の繋がり」を《系統的・体系的・構造的に理解している》ことだと思っています。その意味では，高校生の学びにおける「知識」には「段階的な水準」の違い（質的な違い）があり，自校の「育てたい資質・能力」における「身に付けるべき知識」の在り方・段階的な水準について，生徒に分かりやすく整理しておくことが大事なことだと思います。

◇　同じような意味合いで，技能について捉えてみると（英語の4技能，数学の処理技能，地歴の情報データ読み取り・分析整理技能，体育の運動技能など），技能についても学びの段階としての水準があり，技能の背景にある原理・考え方・手法などと一体的に捉えた水準を高める視点からの「資質・能力の育成」を，ルーブリック表として位置付けて置くことが大事になると思っています。

◇　こうした「知識・技能」の捉え方を軸にすると，マスタールーブリックの枠の「知識・技能」に関する資質・能力の評価基準となる文章表現に「知識・技能を活用することができる（活用している）」を入れ込むことについては，私見的には違和感を感じる面がでます。「知識・技能の活用」は，「知識・技能」の領域よりも「思考・判断・表現」の領域の方がなじみ易いように思っています。

もちろん，学びの実際面では「知識・技能」は「思考・判断・表現」と一体的に機能するものであり，課題テーマに応じて生徒自身が一度調べたり，分類したり，分析したり，実践したりして「思考・判断・表現」を行ったことは，その段階で自分の「知識・技能」の領域に組み込まれる訳ですので，「知識・技能」と「思考・判断・表現」自体には客観的な分ける基準となるものはないと思っています。学びの中のどの活動・機能に「より重きをおいて捉える」ことを自校として明確にするかの相違だと思っています。その意味では，「知識・技能を活用することができる（活用している）」を「知識・技能の欄枠」に用いることは，校内整理が充分に行えていればあり得ると思います。

◇　イメージ的な説明になりますが，「知識・技能」についての段階を「ホップ・ステップ・ジャンプ」の繋がりと段階ごとの違いとして捉えてみるのも分かりやすさになるかも・・と思います。「ホップ」の段階としての位置付け・意義があり，次の「ステップ」への繋がりと「ステップ」自体としての意義があり，「ジャンプ」への繋がりと「ジャンプ」としての意義があるという捉え方です。例えば，「ジャンプ」できるところまでの力の蓄えが「知識・技能」の範疇で，「ジャンプ」の到達点が「知識の活用・応用」などになるなどの捉え方のイメージです。

〔参考〕学校教育法第30条第第2項抜粋：生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

**（４）「資質・能力」の項目数，「レベル設定」の数などの考え方**

◇　マスタールーブリック自体には，「資質・能力の項目数」の目安や尺度として「レベル設定」の数などに正解的なものはないと思っています。学校実状に応じた考え方整理がきちんとできていて，教員にも生徒にも共通理解が成り立っていることの方が重要だと思っています。県教委のマスタールーブリックの様式（レベル1～4までの設定）にも「必要に応じて欄枠の増減可能」となっているようですし，観点別評価自体が3段階になっていることを考えると3段階にしておくのも充分妥当性があることと思います。

◇　「資質・能力の項目数」も「育てたい資質・能力」自体の設定と連動しているので，項目数自体に妥当な数がある訳でもないと思いますし，学びの在り方としても「知識」と「技能」は不可分ですし，同時に，便宜的に分けてそれぞれの特徴的な要素に重きを置いての位置付け方も一般的だと思っています。また，「知識・技能・情報」のような分類も可能だろうと思っています。

◇　「思考・判断・表現の項目数」についても同様の面があり，この3つの要素は相互に深く連関しているので，一体的に扱うこともできるように思えると同時に，関わりの深さに着目して，「思考・判断」を一体的に扱って，例えば「論理的な思考力の育成」を学校としての柱に置くことも可能だと思いますし，「表現」に関わる資質・能力の育成に学校として重点をおくことも考えられると思います。「表現活動」の前提に「思考力・判断力」が一体的に働いているのは当然のことですので，実際の授業の場面の在り方としての位置付けを学校として論議し整理することが大事なことと思います。

◇　「レベル設定」として留意が必要なことの一つに，最高位（例えばレベル4）の位置付け方があります。ルーブリック表では，通常は最高位が「目指す姿・実現したい姿（規準）」としての意味を持ちますので，学校現場では卒業時に「できるようになっている水準」を記すことになりますが，少し，微妙になるのが，理念的には卒業生「全員」の到達水準として掲げつつも実際の姿としては，「道半ば」の生徒が一定数いるのが通常の姿と言え，その意味では，4段階のレベル設定の場合には，「レベル3」を全員に求める水準において，「レベル4」には卒業生の一定割合が「より高い水準」として身に付けてもらいたい「求める水準」を示す手法もあり得るように思います。

**（５）「課題発見・解決力」の位置付け**

◇　今回の学習指導要領の論議では，様々な形で「課題発見・解決力」「課題発見・解決学習」などの用語が使われています。この概念を，「育てたい資質・能力」に位置付けてマスタールーブリックに置こうとすると，3要素との関連をどのように捉えて，どの位置に設けるかで悩まれていた方が複数おられました。私見になりますが，「課題発見・解決力」はかなり大きな概念であり，それに必要な要素を考えてみると，「知識・技能」とも「思考力・判断力・表現力」とも「学びに向かう力」とも深い繋がりが想定されます。位置付け方の一つの手法としては，マスタールーブリックの前段の「育てたい生徒像」や学校全体の教育テーマなどに大きく掲げて（その意味ではマスタールーブリックのタイトルなどに位置付けて）「課題発見・解決力の育成に繋がる知識・技能」「課題発見・解決力の育成に繋がる思考力・判断力・表現力」「課題発見・解決力の育成に繋がる学びに向かう力」の意味で各観点の項目に位置付ける方法や，別の手法として，こうした論議を前提として自校の整理としてより関わりの深い観点に関連付けて（例えば，思考力・判断力・表現力との関わりを重視するなど）位置付ける方法などがあり得ると思っています。

**《補足的に》**

◇　マスタールーブリックの大きな意義は，生徒にとって，授業などの学習内容と自分の学びの状況として「何ができるようになっているか」，「次に何ができるようになることが大事なのか」などの自己理解・自己評価ができるようになることにあると思っています。その意味では，マスタールーブリックの在り方として，内容的には同じ概念ではあるが，分かりやすさに主眼をおいて，教員用と生徒用を分けて位置付けることも考えられると思っています。

◇　生徒に分かりやすい用語・概念整理は，手法や場面は工夫しながらも，生徒に直接聞いてみるなど，生徒の理解度を確認しておくことは大事なことだと思っていますし，それを敷衍して考えてみると，マスタールーブリックの有効期間も，生徒実態・教員実状などを考慮すると1・2年程度で順次改善を重ねることが大事なことだと思っています。